

シリーズ 「発達に違いのある子どもたち」

市では、「障がいのある人、ない人いかかわらず だれもがいきいきと安心して暮らせるまちづくり」を基本理念としてさまざまな施策に取り組んでいます。

今回も、市内で子どもの発達支援に取り組まれているNPO法人「まいすてっぷ」から、発達に違いのある子どもたちについて市民の皆さんに正しく理解いただくために、文章を寄稿していただきました。

問合せ先 福祉課福祉政策係☎ 1111 (内線 2814)

癪しゃくはすべての子どもに起るわけではなく、もともと穏やかであまり怒らない性質の子どももいれば、不満を外に表現できずにシクシク泣いてしまう子どももいます。癪しゃくにつながる要因は、怒りやすい性質や、これまでのやりとりが難しかったり、こだわり（決まったやり方や順番など）が強かつた

発達に違ひのあ
痛いやくは、思うようにな
らない時や、不満や怒りの表
現として起こり、早い子ども
だと1歳前から始まります。
子どもの痛いやくの理由はさ
まざまであり、子どもが育つ
上で誰にでもある通過点かも
りません。しかし、発達に
違いのある子どもの場合、痛
いやくが長時間おさまらず混
乱してパニック状態になつた
り、叩いたり噛みついたりし
てしまうほど激しかったり、
成長し年齢が高くなつても痛
いやくを起こしたりしてしま
うことで、本人も周囲の人も
非常に時間やエネルギーを消
耗する事態となることがあります。

自身痛しやくを起こした原因が何だったかさえも分からなくなるかもしれません。

原因が分かつたら、それを満たしてあげるのが望ましいのか、それとも諦めさせたほうが望ましいのかを判断する必要があります。例えば「痛しあくを起こせばそれがもらう」というパターンを作つ

子どもの瘤しやくり、苦手な感覚（気温や食物の味、臭い、触感覚や音など）が多かったり、周囲の大人が忙しくてゆっくり関われないなかつたりなどさまざまです。発達に違いがあり、コミュニケーション能力の低い子どもは、コミュニケーション手段のひとつとして瘤しやくを起こすので、大人がどう対処するかでおさまり方が違ってきます。まずは、大きな声を出したりせず、瘤しやくを起こした原因を探ることです。こした原因を探ることです。このような子どもたちは脳の特性上、大きな声ばかりが耳に入り、言われている内容はなかなか理解できません。人が怒ってしまえばかえつて

のならば、子どもが落ち着いてから穏やかな声で声がけを行なうことが、望ましい対応方法です。

子どもが落ち着いて話を聞ける状態になつたならば、適切なコミュニケーション手段を教えます。「○○が嫌だつたから怒つたんだね。この次からは、嫌だ！やめて！と言つてくれたら助かるよ」と

場面で癪しゃくを起こせば要
求を満たせると学習をしてし
まいます。一旦そのように覚
えたものは、なかなか切り替
えることが難しくなります。
「○○をなくしてしまった」
という場合などは、いっしょ
に探してあげるなど、子どもの
行動に付き合ってことで落ち
着くこともあります。見つか
らない時は「残念だ」「しか
たないね」などの、諦めのこ
とばを教えるきっかけにもな
ります。パニック状態に陥り
長引く時は、原因と関係のな
い子どものお気に入りのキャラ
クター絵本やとつておきの
おもちゃ、心地良いぬいぐる
みなどで一旦気持ちを切り替
えることもひとつ的方法で
す。ことばで言つて聞かせる

病しゃくを起こしている子ともを目の前にすると、冷静に 対応することはとても難しい ことですが、適切な対応を積 み重ねることで後々楽になる こともあります。まずは大人 側が一度冷静になつて、適切 な方法が分からぬ時は、相 談機関などを利用しながら対 応することが大切です。

など、大人側の感情をことばで伝えることも、感情を読み取ることが苦手な子どもたちにとっては、とても大切なことです。

発達に違いのある子どもの癪しゃぐに対し、大人が罰を与えて暴力を使って力づくでおさめようすることは、子ども側からすると、理由をわかつてもらえなかつたという思いだけでなく、自分の思ひ通りにいかない人に対するは、罰を与えて暴力を使えばいいんだと学習するきっかけとなります。癪しゃぐが、子どもたちのコミュニケーション手段だとすれば、それに対する大人の対応も、ひとつつのコミュニケーション手段として子どもは学習します。

※癪しゃく(かんしゃく) = ちょっとのことにも感情を抑えきれないで激しく怒り出すこと。

参考文献 「Q&A家族のための自閉症ガイドブック」 服部陵子 著 明石書店

NPO法人「ころ・コミュニケーションの発達支援」未いすてっぷより発信